

【寄稿】 奥田八二日記を翻刻して思ったこと

今橋, 省三
元福岡高教組本部書記長

<https://doi.org/10.15017/4068632>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 5, pp.313-314, 2020-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン：

権利関係：



【寄稿】

奥田八二日記を翻刻して思ったこと

今橋 省三

私と奥田知事とのかかわりには次のようなものがあります。1969年、教養部に入学した直後に大学がバリケード封鎖となり、その時の学生部長が奥田教授でした。私は全共闘の側にいました。高教組の一員となっていた1983年知事選挙では、奥田候補の当選に全力を尽くしました。知事の三期目が1992年からの私の高教組本部役員時代と重なります。この年の日記に出てくる学校週休二日制導入と高教組労働講座出席には執行委員としてかかわりました。知事在職最後の日に三役の一員として、知事室で送別のご挨拶をさせていただいたことも記憶に残っています。その後も教研等の席でお話をおうかがいする機会がありました。

この度1992年の日記を翻刻するご縁を頂いて、改めて奥田先生の人となりに触れることが出来ました。その見識に感服するとともに、土に生きる播磨の農民の一人として過ごされた幼少年期が、先生のバックボーンにあることを実感しました。それと同時に経済学の学問を通して貯えられた知識、各地の労働者とふれ合うことで体得された認識が、奥田知事の県政運営に活かされていることを改めて知ることが出来ました。反対派が言うように、また支持する側にも一部ある「何もしなかった知事」では決してないのです。

92年は奥田知事72才で、結果的に最後となる知事三選2年目の年です。健康の衰えに悩まされながらも、ご自身で知事の職責の総仕上げと思い定めて、力を尽くされた一年であったように思います。

数々の成果が得られた年でもありました。

その一つは、11月に行われた福岡県と中国江蘇省との友好提携締結です。この時期、中国は奥田県政に大きな期待を抱いているようです。4月江沢民総書記が初来日した際に、東京以外で訪問したのは大阪と福岡だけです。また11月に調印式のため北京を訪れた知事一行を、異例なことに総書記自身が引見しています。中国と福岡との間には、古代にまで遡る歴史的な繋がりがあるとはいえ、奥田さんが当時国内で唯一の社共共闘で誕生した知事であった事が背景にあるのではないかと、私は推測しています。国内事情からしても、冷戦崩壊後とはいえ共産党統治下の中国へ積極的に交流を深めることは、中央の自民党政権とは一定の距離を置いていたからこそ可能であったと思います。同じ4月大連との間に地方初の中国直行航空路が開設されたことと合わせて考えると、今日福岡がアジアに開かれた玄関口になった礎が奥田知事によって築かれたことは特筆されるべきです。

もう一つは、九州国立博物館設置の道筋がつくられたことです。この年 12 月に初めて国の予算に組み込まれました。勿論、その誘致は以前から県内で様々な取り組みが先行していたのは事実です。しかし、そうした民間、下からの運動の盛り上がりを踏まえつつ、文化の重要性を知る学者がトップの座にあり、そしてその知事が優先的なとりくみを決断し、国との交渉にあたったことが成果に結びついたと言えます。その運動論としての教訓は日記の中でも述べられています。今日、太宰府が海外を含めて多くの観光客で賑わっている背景に、福岡がアジアに開かれた、東京や関西に並ぶ歴史を有する土地であることを保証する国立博物館の存在は大きい筈です。

さらに 8 月の日韓海峡沿岸サミットがあります。その後の十分な成果には直結しませんが、日本 3 人と韓国 4 人の県市道知事が一同に会した会議は世界的にも珍しい取り組みです。外交を中央が一元化するのではなく、隣国の地方同士が交流を深めることは、この地域では歴史的背景を持つとはいえ、地方の時代を率先先取りする取り組みでした。

こうしてみると、奥田知事の下で中央直結ではなく、地方分権が積極的に目ざされたことを歴史的な事実として評価する必要があります。数年後に村山内閣は地方分権推進法を制定し、日本国憲法で初めて規定された「地方自治」を内実化する、民主主義と市民参加をめざす地方分権改革に一步をすすめます。その先取りを奥田県政は実行していたとすることが出来ます。

そして今、福岡がアジアの玄関口、元気ある土地として全国的にも脚光を浴びる存在になっています。その基盤は奥田県政時代につくられたと言うのは言い過ぎでしょうか。